

一条みなみさんの思い  
2014 SDJEN ホームステイプログラム参加者  
3/18/2014

はじめまして、わたしは一條みなみといいます。岩手県の宮古市から来ました。宮古市は漁業が盛んで、一年中おいしい魚が食べられます。山など自然に囲まれたとてもすてきで、大好きな場所です。

2011年3月11日、私が住む宮古市を含む東日本を大きな地震、そして津波が襲いました。当時の私は13歳。地震発生時、わたしは学校の教室で友人たちと話していました。最初に地震に気づいたのは私で、学校での避難訓練通りに机の下に隠れました。「どうせいつもの地震だろう。」わたしの友人たちもそう思っていたそうです。しかしなかなか地震は止まらず、船に乗っているような気持ちの悪い揺れが長い時間続きました。いまでも地震が起きる度、その時の地震を思い出します。揺れが収まると、全校生徒で体育館に避難しました。なかには泣いている子もいました。地震がおさまってすぐになり始めた、大津波警報の声は今でも忘れられません。それでもその時はまだ、この地震・大津波警報をあまく考えていました。

私は、すぐに母が学校にかけつけてくれたおかげで家に帰ることができました。しかし、学校から家へ帰る道路は自分の子供を迎えに行こうとする車、職場から家に帰り家族のもとへ急ぐ車たちが列をなし、宮古では見ることもない大渋滞が起こっていました。また、私の通っていた中学校は高台にあるため、避難するために学校へ向かう車もたくさん見られました。私が住む街は、大混乱が起きていました。今でも時々あの混乱を思い出します。でもこの日が何万人もの人たちから大切な命や家族、家を奪った歴史に残る大惨事になったとはその時は思いもしませんでした。

私は震災が起きてから一週間ぐらいして、通っていた中学校へ行きました。教室に行くとクラスメイトの顔の見たとき、とてもホッとしたのを覚えています。私はその日から、ボランティアを始めました。学校に届けられたたくさんの支援物資を避難所になっている体育館へ運んだり、炊き出しを行いました。その時、たくさんの笑顔を見られたことを今でも覚えています。また、TVが見られるようになって世界中のたくさんの人が、わたしたちのために活動してくれていることを知りました。とても嬉しかったし、感謝の思いをすぐにでも伝えたい思いでいっぱいでした。わたしがこの場でこうして震災のことを話せているのも、みなさんのおかげです。本当にありがとうございます。

わたしは震災にあい、将来世界で活躍したいと考えるようになりました。私は昔から海

外の音楽や映画が好きでしたが、自分の将来とは結びつけて考えていませんでした。しかし、震災を通してたくさんの国が日本のために支援してくれていると知り、恩返ししたいという考えが芽生えました。だからわたしは、大好きな文化のある海外にも関わる仕事に就くことで恩返しをしたいと思っています。

日本国内では今回の震災のことを語り継いでいこうという考えがありますが、ほかの国ではあまり根付いていないように感じます。わたしは日本国内だけでなく、世界の人に自然の怖さを知ってもらいたいです。今回この場でこうして話せたことで、自然の怖さを知ってもらうことができたととてもうれしいです。今回のように、これから世界中のみなさんに自然の怖さと、何かあったとしても私たちが助けてもらったように世界中に仲間がいるということを伝えていきたいです。

震災から三年たち、今宮古は少しずつですが復興が進んできています。津波で流されてしまった商店街やたくさんの店も、仮の建物ではありますが営業がはじまり活気が戻りつつあります。しかし、まだ多くの人たちが仮設住宅に住んでおり昔のように自由な生活を送れていないのも現状です。それでも私たちは前へ進んでいこうと頑張っています。わたしも、少しでも復興の力になれるようできる限りのことをしていきたいです。

Minami Ichijo's Essay  
2014 SDJEN Homestay Program Participant  
March 2014

Hello everyone. My name is Minami Ichijo. I am from Miyako-city, Iwate Prefecture in Japan. My home town is known for its fishing industry and we can eat fresh fish all year round. It is surrounded by mountains and beautiful scenic areas. I love my home town.

On March 11, 2011, a massive earthquake and tsunami hit eastern Japan, including Miyako-city. I was 13 years old. I was chatting with friends in my class when the earthquake struck. I was one of the first students to notice the earthquake and hid under my desk as I learned in fire drills. My friends and I did not take it seriously. We all thought it would be like most other earthquakes with no significant effects. But the shaking continued for a long time. I felt sick from the extended shaking, like sea sickness.

Even now, whenever I feel an earthquake, it brings back the terrible memory from 2011. Remembering back, after the shaking was done, all students evacuated to the gym. Some students were crying. I can never forget the warning announcement of the large scale tsunami, which sounded right after the earthquake. At that time, I still did not think it would be such a large scale disaster. But I was wrong.

My mother rushed to school and I was able to return home, but the streets were packed with cars. Parents were trying to pick up their children and workers were rushing home to be with their families. I never saw such a horrible traffic jam in Miyako-city. My school was located up on a hill, so many people drove cars to school to evacuate.

Miyako-city was chaotic. Even now, I often remember the chaos and confusion back then. However, at that time, I never thought March 11 would make history by taking away lives, families, and homes from tens of thousands of people.

I visited my middle school one week after the disaster and was so relieved to see my classmates. That day, I started volunteer activities. Many relief supplies were received at school, so I helped transfer the supplies to the gym, which was used as a temporary shelter. I also helped cook food for those in need. I still remember seeing

happy faces and smiles at that time. When television service was finally restored, I found out so many people from all over the world were involved in various relief efforts for us. I was so happy and wanted to share my sincere appreciation right away! I thank you, SDJEN members, that I can speak about my experience. Thank you very much. I appreciate so much this opportunity.

After the tragedy, I started thinking about a global career. I always liked foreign music and movies, but never thought about linking my hobby with my future career. But it came to my mind that I want to give back to other countries that have supported Japan through this disaster. My way of giving back is to pursue an international career dealing with culture so that I can connect to the world and various cultures that I love.

In Japan, people want very much to pass the Great East Japan Earthquake experiences and learning to future generations. But I feel that other countries do not share our concern. I strongly hope that everyone in the world (not just people in Japan) come to understand the dangers of natural disasters. I am happy to have this opportunity to share my experience and would like to continue sharing two messages: 1) "Natural disasters should be taken seriously," and 2) "If any disaster strikes, you have friends all over the world, just as we were helped by others."

Three years after the disaster, Miyako-city is slowly but gradually recovering. Shopping centers and stores that were wiped out by the tsunami started operating their business at temporary locations. But it is also a reality that many people still live in temporary housing without the freedom they enjoyed in their own homes. Nonetheless, we continue trying to be optimistic and improve our lives. I want to do everything possible to help support the recovery efforts.

新開翠さんの思い  
2014 SDJEN ホームステイプログラム参加者  
3/7/2014

皆さん、こんにちは。

私の名前は、新開翠といいます。現在、福島県立郡山高等学校に通っている高校二年生です。家族構成は父、母、姉、私、妹、弟の賑やかな六人家族です。今回、このプログラムに参加することができて、とても光栄に思っています。

ではこれから、私が、東日本大震災で経験したことをお話ししたいと思います。

私は当時中学二年生で、学校で被災しました。幸いにも友人や先生、家族は全員無事で、その日のうちに自宅に帰宅することもできました。家の中も大きな被害はなく、度重なる余震の不安はありましたが、『きっと大丈夫だろう』と、心のどこかで思っていました。

しかし、地震に伴う福島第一原子力発電所の事故が、私たちの生活を一変させてしまいました。

私の住んでいた「葛尾村」は、原発から20～30キロ圏内の場所にあります。そのため、村が放射能の危険にさらされるかもしれない、ということはあらかじめ聞いていましたが、ついに地震から三日後の夜、テレビを見ていた時に、村の放送で全村民に「避難するように」との指示が出されました。

私たちはとりあえず、原発から約50km離れた場所にあった、姉が住んでいるアパートに避難しました。その時、村民の多くは、村が指定した避難所に行くように指示されました。私の父は、村で社会福祉士の仕事をしていたので、家族の避難を見届けたあとは、すぐに避難所へ戻らざるを得ませんでした。

こうして避難所にいる父を除いた、私たち家族五人は、小さな姉のアパートで生活することになったのです。一人暮らし用の部屋は狭く窮屈で、五人の家族での生活は、本当に苦しいものでした。先も見えず、この生活がいつまで続くのだろうと、毎日が不安で、胸が押しつぶされそうでした。

そのような中、やはり村に戻ることは厳しく、私は避難先での中学校に編入することになりました。ところが、避難にあたり、私たち家族は、必要最小限の荷物しか持ってきていませんでした。そのため、地震から一ヶ月後に村へ荷物を、取りに行きました。

私が住んでいた地域は、比較的放射線量が低い方で、一時的に帰宅することが認められていました。それでも、避難後一時帰宅して初めて見た村の姿に、私は言葉を失いました。

以前、人が住んでいた場所とは思えないほど、静かで閑散とした村。両親が手入れしていた自宅の庭には、雑草が生い茂り、家の中には湿気がこもって、カビのにおいがたちこめていました。懐かしい懐かしい、自宅の窓からの風景や、部屋に置かれていた思い出の品々を見ると、どうしても涙がこらえきれませんでした。

その当時、避難区域では、人がいないことをいいことに、窃盗が多発していました。また、残された動物が野生化し、あちこち荒らしたり、ペットや家畜があてもなくさまよう光景が見られたそうです。私は、帰宅してから毎日、早く前の村に戻ってほしいと願い続けました。

葛尾村は、国や福島県の指示が出る前に、村長独自の判断で全村民が避難しました。このことは、原発事故後、いち早く村民の安全を確保した、という点で様々なところで評価されました。震災前は、人口約 1500 人の自然豊かな村でした。海から離れていたため、津波の影響も受けませんでした。そのため、震災直後に亡くなった方は他の市町村に比べると少ないのです。

しかし今、私たちは東日本大震災の被害とは、それだけではない、ということをお知らせされています。見えない放射能に不安を抱き、何年後、何十年後の健康までも心配し続けなければならないのです。

さらに、「住んでいた故郷に戻れない」という事実は、想像以上の苦しさがあります。仮住まいでの生活は、解消のめどさえ立たず先の見えない辛さとともに、続けていくしかない状況です。

被災都道府県の中でも、福島県の実情は極めて特殊です。福島でとれた農作物は安全検査をして出荷しても、根強い風評被害で売れないとい深刻な事態にあります。少しずつ除染も進められていますが、見えない放射能への恐怖が、復興の大きな妨げになっていると感じます。

この状況を抜け出すために、私は福島で感じたこと、考えたことを発信していきたいと思っています。それを見て、聞いて、多くの方の支援や協力を続けていただければ復興へ向かう道につながると信じます。

海外の方々からも、日本は様々な支援をいただいています。震災以降、様々な方々の支えがあって、生かされているということ、私は実感しました。今回、このプログラムに参加できたことも、多くの方々の支援をいただいたからです。心から感謝しています。

できれば、なかったことと思いたい、私の震災後の体験が、もし、何かの役に立つのだとすれば、この体験から学んだことを、私が自ら言葉にして伝えていくことではないかと考えます。このような場を与えていただき、少しでも体験をお話しすることができて、嬉しく思います。この感謝の思いが、皆さんに少しでも伝われば幸いです。

最後になりますが、私を支えてくださる、たくさんの方々への感謝の気持ちを忘れることなく、一つ一つの時間を大切にしていきたいと思っています。また、今回の体験を通して学んだことを、地元の復興や自分自身の将来に役立てられるように、日本に帰国したあと、多くの人に伝えていきたいと思っています。最後までご静聴いただき、ありがとうございました。

Midori Shinkai's Essay  
2014 SDJEN Homestay Program Participant  
March 2014

Hello all. My name is Midori Shinkai. I am a junior at Kooriyama High School in Fukushima Prefecture on the main island of Japan. I have a big family consisting of my father, mother, an older sister, a younger sister, a younger brother, and me – six of us. I am so happy to be able to come to San Diego and participate in this homestay program.

I want to share my experience of the Great East Japan Earthquake in 2011. I was an eighth grader and was at school when the earthquake struck. Fortunately, all of my friends, teachers, and families were safe and I was able to return home the same day. There was no significant damage to my house. I was worried about the continuing aftershocks, but I somehow believed that “everything would be all right”.

However, the Fukushima Daiichi power plant disaster drastically changed our lives.

My hometown, Katsurao Village, is located 20-30 km (12-18 miles) from the nuclear plant. So, I was told beforehand that our village could be affected by the radiation. Finally, the third night after the earthquake, television media ordered all villagers to evacuate.

My family went to my sister's apartment, which is 50 km (31 miles) away from the nuclear plant. Most people were told to evacuate to the specified shelter locations. My father was a social worker, so he had to return to the shelter after visiting my family at my sister's place.

So five of us, except my father, had to live in my sister's one-person apartment. It was very difficult to share a single room for five people. I felt like there was no future. I was deeply worried about our future and was concerned about how long this hardship would continue.

I could not return to my hometown, so I transferred to a junior high school near my sister's apartment. But my family brought very limited items, so after one month we returned home to bring back more supplies.

Our area was not affected with an extremely high level of radiation, so we were allowed to return home on a temporary basis. But I could not believe what I saw at that time.

My home town was completely different. There was nobody to be found in the village and I could not believe this was the same place where people lived normal lives one month before. My backyard was full of overgrown weeds. Inside the house, I smelled mold from contaminated air. I couldn't stop crying when I saw the views from my house that I grew up in and all the familiar sights.

During this time, thieves were all over the place since people were evicted and no one was around. Also, some of the pets and livestock that had been left behind turned wild and damaged the area; other animals were just wandering around. Ever since I saw the terrible condition of my village, I have been wishing for my village to return to normal.

The head of Katsurao Village made the decision to evacuate all villagers even before the country and prefecture made the decision. Later, his leadership and prompt decision was praised by many officials and credited with protecting the villager's health. Before the disaster, our village of about 1500 people was a picture of beauty and serenity but all that is gone now.

The tsunami did not hit our village since it is far from the ocean, so loss of life and property damage was minimal. But we realized that loss of life and property damage are not the only kind of damage. Radiation is not visible but we will constantly worry about health effects from the radiation for years and decades to come.

Also, the fact that “I cannot return to my home town” is harder than you can imagine. We need to continue living at the temporary housing without a bright and clear future. It is very difficult to continue living this way.

Fukushima prefecture is very different from other affected prefectures. Farm produce and fish from Fukushima do not sell in the rest of Japan even though they pass the safety inspection. Consumers are afraid of radiation in produce and fish from Fukushima. This is a huge problem as it leaves farmers and fishermen with nothing to do and no purpose in life. There is a great sense of hopelessness. Gradually, officials have begun radiation cleaning, but the fear of invisible radiation in the village and produce and fish will prevent a quick recovery.

To help the recovery efforts, I want to share what I felt and thought in Fukushima. I believe my message will help others to support the continued relief efforts.

Japan has been receiving various support from overseas. After the disaster, I realized that I survived because of other people’s support. I greatly appreciate being invited to join this homestay program sponsored by SDJEN. I deeply thank everyone involved.

If I could, I would just forget all about the disaster and never talk about it. But if sharing my terrible experience will help bring people’s attention to the problem we are facing, I will be happy to speak up and share what I have learned from this event. I am very pleased for the opportunity you have given me to share my experience. I will feel privileged if you can feel my appreciation.

Finally, I would like to spend every precious moment with appreciation and learn all I can from this homestay program. I want to contribute to recovery efforts by sharing my experiences in San Diego and your kindness when I return to Japan.